

「頑張ら」ない



野村アセットマネジメント社長 **中川 順子**
なかがわ じゅんこ

社会人になって5年が経過したころ。東京での社会人生活は長くなりつつあったが、新卒採用などの人事部の仕事から投資銀行の仕事に異動、プライベートでは別居状態の結婚が同居となった直後で、公私ともに環境変化の時期だった。

新婚生活には負担がなかったものの、仕事は全く未知の領域。職場での会話が日本語なのに意味がわからない状況に驚愕。参考書で見たことのある単語に「食らいつく」しかなく、また、上席や先輩の机の証券六法とそれが日常使いされている様子に、気後れどころか気が遠くなつた。その業での独り立ちへの道程があまりに遠く感じられたからだ。

職場環境はよかつた。年の近い先輩は何かと気にかけてくれた。先輩はすでにその領域で勉強を重ねており、温かさとともに経験や知識で助けてくれた。それに、密かに愚痴を聞いてくれる(実際は聞き流し)同期もいた。

そのようななかで、自身は、キャリアを積み上げられる確信は持てず、手探りでトンネルのなかを歩く感じだった。たまに少し明らかが?!と思うと、それが蜃気楼のように遠のく、そんなことが短期間に何度もあった。同僚や先輩と同じことをしようにも、なにせ時間がかかる。当時のIT環境は、社内電子メールが設定されパソコンも1人1台に、が整い始めたころで、まだファックスが多用されていた時代。今ののように、自宅からちよつと連絡を、や、出先から軽く電話連絡を、に

なるのに、あと数年という時期だった。そもそも仕事に時間がかかる私は会社にいる時間も長くなるが、残業に定めがあり、また焦る仕事したいのにと。

そんなとき、上司からこの一言を受けたのだった。

「頑張るな」

優しい?とその瞬間思ったが、見事に違つた。

「成果と頑張りとは、比例しない」

「お客様に良いものを、に、頑張りはいらない。」

成果主義を説くのととは違う。頑張っても無駄だ、というのでもない。シンプルに言えば、言い訳をしない、他人のせいにならない、と解した。その人は、大きな仕事舞い込む人だったが、どんなに難しい場面でもひょうひょうとしていて、肩書経歴で人を区別しない人、私にはそう見えていた。

当時若輩の私は、これを厳しい教えとすべき言葉だったろうが、落ち込むより、その人の言葉だからか、その言葉に、とてもすつきりと気分が変わつたのを覚えている。この考えだと、私はこんなに頑張つたのというネガティブな気持ちになることはない。加えて、時間を費やすことは重要でないのだと思つた。昨今の世の流れに、最近では感染症拡大防止対策が加わり、働き方に大きな変化が起こる。絶妙なタイミングでの心に残る短いメッセージだった、それを最近また思い出した。